

に がつみっ か せつぶん  
2月3日 節分

よる じ す 夜10時過ぎ。カナコはほっとため息をついた。

さい 6歳のカイトをお風呂に入れて、ベッドに寝かしつけたのが9時ちょっと前  
だった。それから、あした あさ 明日の朝ごはんとお昼のお弁当の じゅん び 準備をして、せんたくもの 洗濯物をた  
たんだ。あつという間に1時間が過ぎた。カナコとカイトのふたり す 二人が住む2LDKの  
マンションのそうじ 掃除は、いっしゅうかん 一週間に1回、かい どようび 土曜日の午前中にごぜんちゅう するとカナコは決めて  
いた。だが、つき 月に1回はしっかりやる。その日はカイトがいちにちじゅういえ 一日中家にいないの  
で、そうじ しゅうちゅう 掃除に集中できるからだ。それは、もとおっと 元夫のサトシとカイトの、つき いっかい  
のめんかい び 面会日だ。

カナコとサトシはねんまえ りこん 2年前に離婚した。けっこん ご たが しごと いそが 結婚後、お互いの仕事が忙しくて、な  
かなかふたり 二人の時間がつく 作れなかったこと、カイトが生まれて、仕事をしながらほいく 保育  
園のえん おく むか 送り迎えや、しょくじ ようい 食事の用意などにいそが 忙しくなったカナコを、サトシがしごと い  
い訳にしてあまりてつだ 手伝ってくれなかったことなど、りゆう 理由はいろいろあったが、  
いちばん りゆう 一番の理由はサトシにほか おんな そんざい かん はじ 他の女の存在を感じ始めたことだろう。「週末も仕事が  
ある」とで 出かけていったサトシがうちにもど 戻ったとき、あま こうすい かお かん 甘い香水の香りを感じるこ  
とがあった。それは、カナコがつけるタイプのこうすい 香水ではなかった。

そんなサトシのうわきのかのうせいのたいに対して、カナコはいかやかなのじぶんよりも、自分だけたのんできるというきもちになった。ひとりだけたのしいおもいをして、こそだてとか家事とか、ぜんぶわたしおつかりにお押し付けて、ずるい。それがカナコのほんねだった。

りこんのてつづきは、けっこんのときよりもめんどうだった。それでも、サトシもりこんにはんたいしなかったこと、いっしょにすんでいたマンションからサトシだけがで出ていて、カナコとカイトはそのまますつづけることができたことなどをかんがえると、らくなりこんだったとカナコはあとでおもった。

サトシはりこんするとき、ひとだけじょうけんを出してきた。それがつきに1回のかいトとのめんかいだった。カナコはもちろんどうい同意した。りこんはカナコとサトシのあいだの問題で、カイトからちちおやをうば奪うことは別のべつ話はなしだった。それに、サトシはそれなりにカイトをかわいがっていたし、カイトもサトシといっしょにいるのたのを楽しんでいた。

つきに1回のかいのめんかいの日、サトシはマンションいりぐち入口でベルを鳴らした。カナコはカイトをエレベーターまでみおく見送り、カイトはひとりでした下まで降りて、サトシをむかえ出迎えた。サトシはカイトとその日一日をひいちにちをす過ごした。ゆうえんち遊園地、ドライブ、デパートのおもちゃうりば場、どこに行き、なにをしたかは、うれしそうなえがお笑顔でうちにもどって

きたカイトが<sup>おし</sup>教えてくれた。カナコにはそれだけで<sup>じゅうぶん</sup>十分だった。特に、サトシ  
の<sup>あたら</sup>新しい生活、<sup>あたら</sup>新しい家、そして<sup>いえ</sup>新しい女<sup>おんな</sup>のことは、<sup>し</sup>知りたいとも<sup>おも</sup>思わな  
かった。実際、カナコはサトシが<sup>いま</sup>今どこに<sup>す</sup>住んでいるかということに<sup>きょうみ</sup>さ  
え、興味  
がなかった。カナコとサトシの<sup>あいだ</sup>間には、<sup>かいわ</sup>会話もなかった。カイトからの<sup>はなし</sup>話が、  
カナコの<sup>し</sup>知るサトシの<sup>すべ</sup>全てだった。

それでも、カナコがサトシと<sup>かお</sup>顔を<sup>あ</sup>合わせる日は<sup>ひ</sup>一年に<sup>いちねん</sup>一日<sup>いちにち</sup>あった。それは<sup>せつぶん</sup>節分  
の日だ。毎年<sup>ひ</sup>節分の日が来ると、カイトが<sup>まいとしせつぶん</sup>豆まきを<sup>ひ</sup>した<sup>く</sup>がった。そして、<sup>まめ</sup>豆まき  
には、カナコではなく、サトシに<sup>おに</sup>鬼の<sup>やく</sup>役を<sup>おに</sup>してもら<sup>やく</sup>うことが<sup>じょうけん</sup>条件<sup>じょうけん</sup>だった。

スーパーに<sup>せつぶん</sup>節分の<sup>まめ</sup>豆のコーナーが<sup>まめ</sup>できるころ、カイトは<sup>まめ</sup>すぐにカナコに<sup>き</sup>聞  
いた。

「ねえ、ママ。<sup>まめ</sup>豆、<sup>う</sup>売ってるよ」

<sup>まいとし</sup>毎年<sup>まいとし</sup>のことだが、<sup>こ</sup>どうしてこの子は<sup>こ</sup>こんなに<sup>せつぶん</sup>節分の<sup>まめ</sup>豆まきが<sup>す</sup>好き<sup>す</sup>なんだろう、と  
カナコは<sup>おも</sup>思った。

「そうね、<sup>きょうか</sup>今日<sup>きょうか</sup>買って<sup>きょうか</sup>おこうか。」

カナコは<sup>まめ</sup>豆まき用の<sup>まめ</sup>豆と、<sup>おに</sup>鬼の<sup>めん</sup>面も<sup>わす</sup>忘れ<sup>か</sup>ずに<sup>か</sup>買って<sup>か</sup>おいた。これをサトシが<sup>か</sup>つけ  
れば、<sup>おに</sup>鬼になる。色<sup>いろあざ</sup>鮮やかなその<sup>おに</sup>鬼の<sup>めん</sup>面は、<sup>こわ</sup>怖い<sup>かお</sup>顔のはずだが、<sup>こどもむ</sup>子供向<sup>こどもむ</sup>けだから  
なのか、<sup>かおだ</sup>ちょっと<sup>かおだ</sup>やさしい<sup>かお</sup>顔<sup>かお</sup>立ち<sup>かお</sup>だった。その<sup>こわ</sup>せいか、<sup>かお</sup>怖<sup>かお</sup>そう<sup>かお</sup>な<sup>かお</sup>顔<sup>かお</sup>を<sup>かお</sup>しているが、  
<sup>み</sup>見る<sup>かくど</sup>角度<sup>かくど</sup>によっては<sup>な</sup>なんだか<sup>な</sup>泣<sup>な</sup>き<sup>な</sup>そう<sup>な</sup>な<sup>な</sup>顔<sup>な</sup>にも<sup>み</sup>見<sup>み</sup>えた。

せつぶん ひ  
節分の日、マンションの入りぐちでベルを鳴らすサトシに、インターフォンで「今  
ドアをあけるから、そのまま入ってきて」とカナコは伝えた。上の階まで上がった  
てきたサトシは、げんかん のドアを開けた。カイトは「パパ」とさけ 叫んで、サトシにと  
びついた。サトシはえがおでカイトをだ 抱きしめながら、へやをぐるっとみ 見まわした。  
そのめは、かつてじぶん す 自分が住んでいたところと今とでなに おな なに ちが さが  
ているようにみえた。サトシのそんなまちが さが 間違い探しのゲームを、カナコはすこ はな  
た場所からなが 眺めていた。

サトシはカナコにもおな えがお む 同じ笑顔を向けて、「今年もしっかりおに  
た。なんだかへん い かた 変な言い方に、カナコもわら 笑いながら「はい、今年もしっかりおねが  
しますね」といって、ようい おに めん てわた 用意しておいた鬼の面を手渡した。

まめ  
豆まきが始まった。豆まきのやり方はいろいろだが、いっぼんてき 一般的なのこうだ。  
まず、まど あ おに そと い いえ そとがわ まめ  
窓やドアを開けて「鬼は外」と言いながら、家の外側へと豆をまき、それ  
からすぐにまど し つぎ いえ うちがわ む  
窓やドアを閉める。次に家の内側に向かって、「ふく うち い  
ら豆をまく。つまり、「鬼は外」と「福は内」をこうご おこな  
交互に行うことで、わる  
外にそと お だ い いえ まね  
追い出し、良いものを家へと招くのである。

しかし、カナコはカイトのやりたいようにやらせていた。カイトのやり方はこ  
うだ。おに めん  
鬼の面をかぶったサトシが家の中を走り回り、それをカイトが追いかけて

わして、<sup>まめ</sup>豆をまく。そして、「<sup>おに そと</sup>鬼は外」と言う。サトシは<sup>せんめんじょ だいどころ</sup>洗面所、台所、それから<sup>へや</sup>カイトの部屋と、<sup>へや じゅう はし まわ</sup>部屋中を走り回った。カイトは<sup>まめ</sup>豆をにぎる手を振り上げて、「<sup>おに そと</sup>鬼は外！」とサトシをめぐらして<sup>まめ</sup>豆をまこうとする。カイトは<sup>こうふん</sup>興奮しすぎて、<sup>まめ な</sup>くさんの豆を投げられないで、<sup>すうつぶ まめ ゆか お</sup>数粒の豆が床に落ちるだけ、ということもあった。<sup>まど あ</sup>窓を開けてベランダへと<sup>いどう</sup>移動したサトシを追いかけ、<sup>まどご おに そと</sup>窓越しに「鬼は外」とカイトが<sup>まめ</sup>豆をまいた。ベランダに<sup>まめ ち</sup>豆の散らばる音が<sup>おと ひび</sup>響き、カナコは<sup>きんじょ そうおん く</sup>近所から騒音の苦<sup>じょう く</sup>情が来るのではないかと<sup>しんぱい</sup>心配になった。カイトは<sup>おに お</sup>鬼を追いかけまわし、<sup>せいたい</sup>盛大に<sup>まめ</sup>豆をまいた。鬼が<sup>おに げんかん</sup>玄関のドアを開けて、<sup>あ そと で</sup>外に出ていくまで、カイトは「鬼は外！<sup>おに そと</sup>鬼は外！」を繰り返した。

<sup>いち どそと で</sup>一度外に出ていったサトシが、<sup>おに めん はず もど</sup>鬼の面を外して戻ってきた。ずいぶんと走り<sup>まわ</sup>回ったので、<sup>いき き ひたい あせ う</sup>息が切れ、額には汗が浮かんでいた。息を<sup>いき ととの</sup>整えながら、リビングのほうへと<sup>ある</sup>歩いてくる。

「鬼はもう出て行ったよ」とサトシはカナコに<sup>こえ</sup>声をかけた。カナコは「カイト、<sup>おに で い</sup>鬼はもう出て行ったらしいよ。ありがとうね」とカイトの<sup>あたま</sup>頭をなでた。床や廊<sup>か うえ</sup>下の上には、あちらこちらに<sup>まめ お</sup>豆が落ちている。カナコは「カイト、あの<sup>まめ ひろ</sup>豆を拾うのを<sup>てつだ</sup>手伝ってくれない？」と<sup>こえ</sup>声をかけた。「はい」と<sup>げん き こえ</sup>元気な声でカイトは<sup>まめ</sup>豆を<sup>ひろ</sup>拾いだした。これも<sup>あそ</sup>遊びの一種だと思っているようだ。

サトシは<sup>だいどころ い</sup>台所に行って、<sup>と だ</sup>戸棚を開けるとコップを取り出し、<sup>すいどう みず</sup>水道の水をいっ

ばいに入れると一気に飲み干した。ごくごくとおとたみずの音を立てて水を飲むサトシの首筋を見て、前よりちょっと太ったかなとカナコは思った。

「ママ、豆、拾ったよ」とカイトは箱に入った豆をカナコに差し出した。「早かったね、ありがとう」とカナコは受け取り、「じゃあ、年の数だけ、食べようか。カイトは6歳だから、6粒ね」と右手の上に豆をおいてやった。カイトは、一粒ずつ口に入れながら、サトシのほうへと歩いていき、その足に抱きついた。

サトシが帰ってから、カナコとカイトはスーパーで買って来た恵方巻を夕食にした。こんな習慣、小さいころはなかったのにな、とカナコは心の中で思いながら、その年の恵方である、南西の方向を向いて、無言で恵方巻という名前の海苔巻きを食べた。

お風呂から出たカイトは、疲れたのか、自分からベッドに入り、すぐに寝息を立てはじめた。カナコは缶ビールを手に、窓の外の方を見上げた。空気は澄み切って、いつもよりたくさんの星が見える。きれいだな、と眺めていたら、ふと涙が出そうになった。疲れたからかもしれない、とカナコは思った。人は疲れているときに泣きたくなるものだから。

そろそろ寝ようと思って、カーテンを閉めようとしたとき、カナコは足の裏に軽い痛みを感じた。カナコが踏んでいたのは、カイトが拾い忘れた、節分の豆の一粒だった。カナコはその一粒を拾い上げた。今年も節分は無事に終わった。

きっと来年もその次の年も、同じようなことを繰り返すのだろう。でも、いつか  
カイトは鬼を必要としなくなる。豆まきを今日みたいに楽しめなくなる。何年後  
かわからないが、その日が来るまで続けるしかない。この不思議な家族ごっこを。

そういえばカイトは一回も「福は内」と言わなかったなど、カナコは思った。  
そして、小さな声でつぶやいた。

「福は内」

(3410字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この  
作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use  
this work, please indicate the source as in the example above.